

ルドルフ・シュタイナーの 幼児教育に関する一考察

馬場 結子

(2010年10月14日受理)

要約

本稿は、ルドルフ・シュタイナーの幼児教育について考察するものである。シュタイナーは、子どもの発達を基盤にしながら幼児期の子どもの特質を明らかにした。そこから、彼は幼児教育の内容や方法を考察したのである。このなかで、シュタイナーは、大人と子どもの関わりについて「模倣と模範」の論理を示しながら、幼児期の子どもが模倣によって学ぶこと、そのため大人（保育者）には模範的な態度が求められることを明らかにした。さらに、彼は、幼児の遊びには知的な要素ではなく、美的要素を重視して子どもの想像力を育むことを説いた。シュタイナー幼稚園ではこうしたことが実践されている。シュタイナーの幼児教育では、子どもの成長に合わせて教育がおこなわれるのであり、子どもの立場を考慮した教育がおこなわれているといえるのである。

キーワード シュタイナー、子ども、幼児教育、保育、遊び

1 はじめに

日本では、1970年代に子安美知子がシュタイナー教育を紹介して以降、ルドルフ・シュタイナー（1861-1925）が創設した自由ヴァルドルフ学校や彼の思想に対する関心が高まっている。近年では、日本においてシュタイナー学校や幼稚園、保育所が設立された。また、世界にはヨーロッパを中心にアジア、アフリカ、アラブを含めて、シュタイナー学校は1000校、さらにシュタイナー幼稚園は1500園あるといわれている¹⁾。彼の思想や教育実践のどのような点が人々に共感をもたらすのであろうか。

シュタイナーが活躍した時代にはドイツにおいて新教育運動が展開され、児童心理学や教育学、また医学の立場から子どもについての研究が盛んにおこなわれた。シュタイナーは人智学を基盤にしながら、子どもの発達や教育についての見解を明らかにしている。本稿では、そうした彼の見解について考察していきたい。

さて、これまでの研究ではあまり触れられなかったが、シュタイナーは幼児教育に

ついて多くの見解を述べているが、シュタイナー幼稚園は彼自身が創設したのではなく、彼の指導を受けたE. M. グルネリウスによって始められている。そこで、本稿では、シュタイナーの幼児教育について彼の考えを示しながら、さらに後継者のグルネリウスがどのようにシュタイナーの考えを受け継いだのか、彼女が設立したシュタイナー幼稚園についても考察していきたい。

また、日本ではフレーベルの幼児教育がすでに導入され、シュタイナーと同時代のモンテッソーリの教育についても関心が高い。シュタイナーの幼児教育をそれらの教育と比較することで、彼の幼児教育の位置づけを探っていきたい。

2 幼児について

シュタイナーは、幼児をどのように捉えていたのであろうか。彼は、子どもの成長において歯牙交代に注目していた。子どもには周知のように生後まもなく乳歯が生え始めるが、やがて永久歯に生えかわる時期が到来する。この時期にシュタイナーは注目し、誕生から歯牙交代までの子どもをそれ以後の子どもとは区別して捉えたのである。そこで、本論ではこの誕生から歯牙交代までの子どもを幼児の範疇として考えながら、この時期の子どもの特徴を明らかにしていきたい。

2-1 幼児という存在

子どもの発達は通常、遺伝と環境のなかで理解されているが、誕生から歯牙交代までの子どもにおいてそれはどのように関係しているのであろうか。シュタイナーは次のように述べている。「遺伝は子どもの最初の時期において最も重要なものですが、次第に環境に対する人間の適応が現れます」²⁾。シュタイナーによればそれは子どもの歯において顕著に現れている。乳歯は生後6ヶ月頃から生え始めて7歳頃から永久歯に生えかわるが、そうした過程のなかで子どもにおいて変化が生じている。「乳歯が永久歯に生えかわることによって生じる驚嘆すべき過程を、人間の認識能力のすべてをあげて一度調べてごらんください。乳歯のなかには遺伝されたものがあります。乳歯は外の世界に対してまるで役に立たないように見えます。そしてそれぞれの乳歯の上には、次第にもう一つ別の永久歯がかぶさります。このかぶさるときに、乳歯の形が利用されますが、永久歯の形は少しばかり異なったものとなって外の世界に適応されます。歯において生じることはこの年齢の子どもの全機構において見られます。歯牙交代は、あからさまには見えないその他の出来事の一つの徴候に過ぎません。子どもは歯牙交代の時期に、遺伝の継承から環境の適応に変化するのです」³⁾。幼児においては乳歯で過ごす期間が長いいため、遺伝として継承したものを体内に保持していると考えられる。そして、この乳歯を基盤にしながらか次第に歯牙交代によって永久歯が生え始め、幼児は環境に適応していく。幼児のなかで遺伝と環境への適応が連動しながら生の営みが続けられていくといえるだろう。そしてこうした現象は子どもの歯に

限られたことではない。それは、この時期の子どものあらゆる機構において生じるものであり、子どもの歯が視覚的にそれを明らかにしているのである。

では、誕生から歯牙交代までの子どもの身体はどのような状態であると考えられるのであろうか。シュタイナーはこれについて次のように述べている。「歯牙交代までの子どもは全機構通じて感覚であります」⁴⁾。「実際に、とりわけ3歳までひいては7歳までの期間は、人間の発達全体において最も重要です。なぜなら、この期間の子どもはそれ後の子どもと比較してみると人間として全く異なるからです。子どもは最初の期間において完全に感覚器官であります」⁵⁾。子どもが感覚器官そのものであるとはどのような意味であらうか。シュタイナーによればこれはさらに次のように説明される。「人間は後年において食物を口の中、口蓋、舌で味わいます。味覚はいわば頭部に限られています。子どもの場合、特に人生の初期においては、これはあてはまらず、味覚は全機構において広がります。子どもは母乳や最初の栄養物を手足においてまで味わうのです。後年において舌で感じることは、子どもの場合全機構において感じます。子どもはいわば取り入れるものすべてを味わいながら生きているのです」⁶⁾。誕生から歯牙交代までの子どもは身体全体において感覚器官であるため、味覚は身体全体に広がっていく。この時期の子どもの食物、特に離乳食では刺激の強いものが避けられるが、それは子どもの身体において感受性が強いことを配慮したものである。子どもにとって消化しやすい食べ物が与えられなければならないのである。ところでこうした現象は味覚に限られたことではない。シュタイナーはまた次のように述べている。「味覚がすべての身体の機能に広がっているように、目や耳のみ限定されることが子どもの全機構において広がっています」⁷⁾。「私たちが大人の場合に目あるいは耳を観察するように、子どもを観察するならば、私たちは子どもを理解しているのです。子どもは感覚器官であります」⁸⁾。子どもは味覚だけではなく、視覚や聴覚においても身体全体において感じるものであり、子どもの感覚は身体全体に及ぶものとして考えなければならないのである。そこでシュタイナーは次のように述べている。「子どもは感覚器官であり、眩しさや音を伴う外の世界に耐えられないために、十分に眠らなければなりません。眩しい太陽の光が入り込んでくるならば、目を閉じなければならないように、子どもは感覚器官であるゆえに環境に対して閉じこもらなければならないのであり、十分に眠らなければならないのです。なぜならば、子どもは環境に向き合っているのならば、それを観察しなければならないのであり、心のなかで話していなければならないからです」⁹⁾。感覚器官そのものである子どもにとって、外の世界は刺激の強いものであり、疲労がもたらされる。子どもの身体全体がその影響を受感するからである。その間子どもは心のなかでそうして感じたことをつぶやいていなければならないのである。したがって、この時期の子どもには十分な睡眠が必要であり、生後まもない子どもにあっては一日の大半が眠りのなかであらねばならない。幼児においてもたとえば外遊びには光や音などの刺激が含まれるために、十分な休息や睡眠が必要になる。

このように、誕生から歯牙交代までの子どもは感覚器官そのものであり、外の世界からの刺激を感受しやすいために、十分な睡眠や休息が必要になる。乳歯がやがて永久歯に生えかわる頃、子どもは外の世界に適応するようになるのである。それまでの子どもは少しずつ環境に慣れていけばよいのである。

2-2 基本的な活動について

子どもは母の胎内で宿り、やがてこの世に誕生して成長していくのであるが、人間の子どもは「生理的早産」のために、歩くことを時間をかけて学ばなければならない。シュタイナーは「人生にとって標準的な三つの活動、歩くこと、話すこと、考えることを人生の初期にどのように獲得するか」¹⁰⁾ということの一つのテーマとして考察しているが、以下ではそれについて考えてみたい。

まず、歩くことについて考察していくことにする。誕生後まもない子どもにおいては立つことができないために、さらに歩くことができるまでには時間が必要である。子どもが這うようになるのは生後3ヶ月になる頃であり、つかまり立ちは9ヶ月を経た頃である。そして、子どもが歩くようになるのは生後1年を過ぎた頃である。子どもは直立歩行するまで絶え間ない努力をしているのであるが、子どもが歩くことができるようになるためにはどのようにすればよいのだろうか。これについてシュタイナーは次のように述べている。「さまざまな外からの強制手段、それが正しいと見なされたからですが、そうした手段によって歩くことや空間のなかで方向を正すことを強制された子どもが、50歳もしくは50歳と60歳の間の年齢になった場合を考察してみます。この子どもが人生においてその他には何も影響を受けない状況のもとでは、こうした年齢に到ると、治癒することのできないあらゆる代謝疾患、リウマチ、痛風などに罹るのです。子どもの場合、直立の姿勢や歩くことを強制したり、冷淡な心でそれをさせるならば、魂や精神に影響が及びます。それはまた身体にも影響していつまでも残ります。極めて問題のある方法でうみだされたものは生涯において残り、それが正しくないものであるならば後年になってから身体の病気になります」¹¹⁾。子どもが自然に歩くようになるまで、子どもの傍らにいる大人は静かに待たなければならない。もし大人が子どもに無理に立たせたり、歩かせたりするならば、それは子どもの心に負担をかけることになる。その結果、その子どもは後年においてリウマチや痛風などの病気を患うようになるのである。シュタイナーは次のように述べている。「愛情をもって歩くことの手ほどきを受けた子どもは健康な人間に成長します。歩くことを学ぶときに愛情が示されることは、子どもの健康教育の良い部分です」¹²⁾。子どもは愛情深く見守られながら歩行を学ぶことによって、生涯において健康的に歩くことができるようになるのである。温かい励ましが生涯において正しい歩行を促すと考えられる。

次に、話すことについて考察する。子どもは誕生後まもなく発声し始め、やがて意味のある言語を話すようになる。それは子どものなかでどのように行われているので

あろうか。シュタイナーは次のように述べている。「今日の生理学では、私たちが生活のなかで右手を動かしている間中、脳の左側の回旋が言語の原動力を促していることが明らかになっています」¹³⁾。そしてさらにシュタイナーは次のように述べている。

「次にお話することは真実です。話すことは左脳の回旋に対応する右手の動きから生じるだけでなく、人間のすべての運動機構から生じます」¹⁴⁾。「言葉のニュアンスは運動機構にあります。生はまずジェスチャーであり、そしてジェスチャーは内面的に言葉の原動力に変化します。そのため、話すことは歩くこと、つまり空間のなかで方向を正すことの成果として生じるのです。そして、私たちが愛情たっぷり子どもに歩かせるきっかけをつくってあげることが、言葉を使いこなすことになるのです」¹⁵⁾。「もう一度お話をすると、子どもはまず全機構を通して話すことを習得します。まず外面的な動き、脚の動きとともに、はっきりとした言葉の輪郭が与えられ、腕や手の表現とともに語形変化や語形が生じます。子どもの場合、外面的な動作が内面的に言葉の動きへと変化していきます」¹⁶⁾。話すことは子どもの身体全体に関わるのであり、話すことは歩くことを基本にしながら、脚の動きによって言葉の輪郭が描き出され、さらに手や腕の動きにより豊かな言葉の表現が生み出されるのである。つまり、子どもは身体のすべてを使って話しているのである。では、このような子どもに大人が話しかけるとき、どのような態度が望ましいのであろうか。シュタイナーは次のように注意を促している。「私たちが子どもの程度にまで引き下げて子どもと話すことが子どもにとっては良いことであると、しばしば子どもの周囲の環境のなかで信じられています、それは不誠実の一つに数えられます。子どもは無意識に、子どもらしくしつらえた言葉ではなく、大人の真実な言葉を聞こうとしています。私たちが生活のなかでなじんでいる言葉で子どもに話しかけなければならないのであり、特別にしつらえた子どもの言葉で話しかける必要はありません」¹⁷⁾。子どもは発達の初期段階では子ども言葉を話しているが、子どもの傍らにいる大人は、そうした子どもの状態に合わせるのではなく、いずれは子どもが正しい言葉を使用できるように、日常生活において大人が使用している言葉で話し続けなければならない。それが、子どもに対して誠実な態度を示したことになるのである。シュタイナーによれば、大人の不誠実な態度は次のような事態を招く。「私たちが、子どもの舌足らずな言葉、子どもの不完全な言葉を使うのならば、私たちはそれを聞く子どもの消化器官を損ないます」¹⁸⁾。「人生の後年において生じる消化器官の病気の大半は、間違った言葉の習得から起こります」¹⁹⁾。子どもが後年において胃腸障害などの消化器系の病気ですむことになる要因は、シュタイナーによれば正しくない言葉の習得にあると考えられる。話すことは子どもの身体全体に関わることであり、それは子どもの生涯において関わることを大人は理解していなければならないのである。

最後に、考えることについて取り上げることにしたい。シュタイナーは思考について次のように述べている。「話すことは、歩くことから、物をつかむことから、人間の運動から生じるように、さらに思考は話すことから生じます。私たちは子どもの歩

行を援助する場合に、すべてが愛情で満たされるようにしなければなりません。子どもは環境のなかで実在しているものを内面的に模倣するので、私たちは子どもが言葉を習得する場合には誠実でなければなりません。子どもは感覚器官であり、精神的なものを内面的に、身体的に模倣します。話すことによって正しい思考を引き出すには、子どもの環境のなかにある私たちの思考が明晰でなければなりません²⁰⁾。子どもの思考のはじまりにおいては話すことが基盤になる。子どもは話しながら多くのことを考えるようになるからである。したがって、子どもの環境世界にいる大人にあっては、思考が明晰でなければならない。大人が子どもに話しかける限りにおいて、大人の思考は子どもに影響を与えるからである。シュタイナーはそれについて次のように述べている。「私たちが子どもに、子どもの環境のなかで何かある指示を与えて、そのあとで撤回したり、何か別のことを言うならば、それは事態が混乱することによって憂慮すべきこととなります。子どもの環境のなかで生じる思考の混乱は、私たちが今日の文明において神経症と名づけているものの本元です」²¹⁾。子どもの思考が混乱しないように、大人は首尾一貫した思考内容を話さなければならない。子どもはそのような環境においてのみ安心して物事を考えることができるのである。

子どもの基本的な活動、歩くこと、話すこと、考えることは生涯において必要な学びである。この三つの活動は相互に関連しながら展開していく。子どもの傍らにいる大人は子どもの環境世界の一部である限り、教育的配慮を怠ると後年において子どもに疾患を与えることになる。子どもの養育には大人の正しい態度が望まれるのである。

3 幼児と教育

子どもは日常生活のなかでさまざまなことに出会い、体験していくなかで見識を深めていくが、そのとき、子どもの心はどのように働いているのだろうか。ここでは、子どもの心について考察し、さらに子どもがどのように多くの事柄を学ぶのかを洞察していきたい。

3-1 子どもの心

子どもにおいては通常どのように心ははたらくのであろうか。シュタイナーは心のはたらきについて次のように述べている。「心というものは、つまり心の内容ですが、私は大まかな輪郭で述べますが、それは、思考のなかに、感情のなかに、意志のなかに現れるのです」²²⁾。つまり、シュタイナーは心のはたらきを知情意において捉えている。そして、彼はまた次のように述べている。「健全で力強い意志の発達のための基礎は、考察された教育原理を正しく取り扱うことによって、最初の7年間に構築されるのです」²³⁾。シュタイナーによれば、誕生から歯牙交代がおこなわれる7歳までの子どもにおいては、とりわけ意志の発達が顕著であり、これを特に丹念に育てる必要があると考えられる。

子どもの心のはたらきは、先述したE. M. グルネリウスによると、大人の場合とは異なっている。彼女によれば、心のはたらきは大人と子どもでは異なるのであり、大人の場合は1思考、2感情、3意志の順序ではたらき、子どもの場合は1意志、2感情、3思考の順序ではたらいっている²⁴⁾。たとえば、大人が何か行動をおこす場合、まずそれがどのようなものであるのかを考えて、次にそれについてさまざまな感情を抱き、最後にそれを実行するかどうかを決める。しかし、子どもはまず、手当たり次第、行動してみるところから始まり、その結果それについてさまざまな感情を持ち、最後にそれについて考察する。子どもの場合は、まず行動してみようという意志から物事が始まるのである。

では、子どもの意志はどのように育つのであろうか。シュタイナーは次のように述べている。「あなたは子どもに一度正しいことを述べることによってではなく、あなたが今日、明日、そして明後日、何か子どもに行わせることによって、あなたは意志衝動に正しい効果をもたらすことができます。正しいことは、あなたが子どもに注意を与えたり、しきたりを説くことを目指すことにあるのではなく、あなたがとにかく何か、子どものなかで正しいことに対する感情が呼びさまされると信じることに目を向け、そしてそれを子どもに繰り返し行わせることにあるのです。あなたはそのような子どもの行為を習慣へと高めなければなりません」²⁵⁾。つまり、子どもが正しい行為を何度も繰り返すことで、子どもの意志が育てられると考えられるのである。それは習慣化されるまで繰り返さなければならない。そのためにシュタイナーは、次のような方法が効果的であるという。「なぜ芸術的な要素がとりわけ意志の形成に影響を及ぼすのでありましょうか。これは第1に練習においては繰り返しに基づくからであり、第2に芸術的に身につくことは繰り返し喜びをもたらすからです。人は芸術的なものを繰り返して楽しむのであり、それは一度だけで終わるものではありません。それはすでに、人間に一度だけ活気を与えるものではなく、直接的に繰り返し楽しませるための傾向をもっているのです」²⁶⁾。芸術において練習は欠かせないものであり、子どもは繰り返し練習するなかで、芸術の美しさに触れ、感動し、喜びを感じていくのである。そこに、さらに体験してみたいという子どもの意志表示があらわれる。芸術の美しさに子どもは何度も触れるたびに、正しい意志が芽生え始めるのである。

また、シュタイナー幼稚園の指導者フライヤ・ヤフケによると、子どもにおいては3歳頃からファンタジーが芽生え始め、このファンタジーのなかの意志によってさまざまな遊びが作りだされる。子どもの遊びのなかにある「見立て」は、その典型例である。子どもはブラシでさえも遊びのなかで船や飛行機に代用する²⁷⁾。子どもの意志はファンタジーによって遊びをうみだす原動力となるのである。

3-2 模倣と模範

次に、子どもが生活世界のなかでどのような方法で多くの事柄を学ぶのかを考察していきたい。シュタイナーは次のように述べている。「どのように子どもが自分の環

境と関わるかを提示する二つの魅力的な言葉があります。これは、模倣と模範です。ギリシャの哲学者アリストテレスは人間を最も模倣的な動物であると言いました。この言葉は歯牙交代までの子どもに最も適用されます²⁸⁾。「私たちが正しい仕方、いかに子どもは模倣的で感覚的な存在であるかをみるのが問題です。なぜなら、すべてのことが人生の初期において模倣によって学ばれるのであり、環境の模倣によって獲得されるからです²⁹⁾。シュタイナーはアリストテレスが目した模倣を取り上げ、この模倣活動がとりわけ誕生から歯牙交代までの子どもにおいて顕著にみられることを示したのである。

では、どのように子どもは周囲の環境を模倣するのであろうか。シュタイナーは次のように述べている。「7歳までの子どもの全生活は環境のなかで起こることの絶え間ない模倣です。そして子どもがとにかく何か知覚する時点において、それが運動であっても、音であっても、子どものなかで自分の内面性から知覚したものを手まねしたり、追体験したりする衝動が起こります³⁰⁾。誕生後まもなく子どもは、周囲の話し声や動きを知覚し始める。やがて子どもは歩き始めるようになると、さらに行動範囲をひろげて、さまざまなものと関わるようになる。7歳までの子どもは、絶えず周囲の環境を身体全体で感じながらそれを模倣しようとするのである。そのなかで子どもは多くのことを学ぶ。たとえば具体的に言葉の習得についてシュタイナーは次のように述べている。「子どもの生活を詳細にのぞいて見ますと、すべての言葉、すべての言葉の習得は、子どもが自分の感覚によって周囲のなかで観察したり、意識せずに観察したことの模倣に基づいていることに気がつきます³¹⁾。子どもはたとえば周囲の大人が話している言葉を聞いて、それを自然に模倣して言葉を発している。子どもの言葉の習得には、周囲の大人が言葉が影響を与えているのである。したがって、前章において、大人が子どもに言葉を話すべきではないとしたのは、子どもが正しい言葉を習得するのに妨げとなるからである。

子どもの傍らにいる大人が環境の一部である限り、大人の態度は模範的でなければならない。シュタイナーは次のように注意を呼びかけている。「子どもは私たちの言葉や行為によってのみ自分の本質を形成するのではなく、私たちの心的態度や考え方、感じ方によっても自分の本質を形成します。そこで、7歳までの子どもの初期の教育にとっては、いかなる環境であるのかが最も重要です³²⁾。7歳までの子どもは言葉の習得だけでなく、物の考え方や感じ方までも大人を模倣する。シュタイナーはまた次のように述べている。「大人の近くで成長している子どもは、教育者の極めて弱い物的な状態も模倣します。子どもは、大人の顔の表情、大人がひどく心配そうに話したり、ひどく心配にそうに感じたりすることを知覚して、完全にそれに合わせます。なぜなら子どもは完全に感覚器官であるからです³³⁾。大人の暗い表情や不安な気持ちは、子どもの心を動揺させる。子どもは、大人を模倣しながら自己を形成するのである。したがって、子どもの環境は、子どもが模倣する限りにおいて大人も含めて模範的なものでなければならないのである。

4 幼児と遊び

子どもはさまざまな遊びをするが、子どもにとって楽しい遊びとはどのようなものであろうか。ここでは、シュタイナーが考える遊びの意義について検討し、さらにシュタイナー幼稚園ではどのように遊びがおこなわれているのかを考察していきたい。

4-1 シュタイナー教育における遊び

子どもは遊びのなかでさまざまな遊具を使って遊ぶ。では、どのような遊具が子どもにとって望ましいのであろうか。シュタイナーは子どもの遊具について次のように洞察している。「母親、時には父親もまた、たとえば小さな娘に遊具として、とても美しい人形を贈ることがとりわけ必要であると思っています。この「美しい人形」は、「本物の」髪をもっていたり、また本物のように塗料をぬられたり、それどころか寝かしつければ目を閉じ、起こすと見つめるといふ動く目をもっていたり、しかもそのうえ動く人形が作られたりするのですが、そうした人形は芸術的ではないために見るも恐ろしいものです。要するに、子どものおもちゃは奇妙で非芸術的で、誤って考えられた生を模造して、子どもに近づかせているのです。人形は一つの特徴的な例にすぎません。私たちはすべてのおもちゃをしだいに私たちの文明からそのようなものに形作っています。このおもちゃは最も恐ろしい子どもの殴り合いのようなものです^[34]。現代の文明ではおもちゃはできる限り精巧に、本物と変わらないように作られることをよいとすむ傾向にあるが、シュタイナーはそうしたおもちゃは子どもには良い影響を及ぼさないという。では、子どもにとって理想的な人形とはどのようなものであろうか。シュタイナーは次のように述べている。「子どもが4歳、5歳さらに6歳、7歳までの素朴な思考において、立つ場合、垂直に方向を定める場合、歩く場合にすでに内面的に体験することを考慮に入れますと、ハンカチで形作られた人形、つまり上に頭があり、おそらく目としてインクのしみがついているものが与えられます。この人形において、子どもが理解できる、また子どもが愛着をもつことのできるすべてがあるのです。そこに、子どもが幼年期においてもっばら見通せる人間の形態の性質が素朴なやり方で現存しています。子どもは、人間が直立していること、上半身と下半身があること、上半身には頭があること、そして両目があること以上には何も知らないのです。口は、子どもの絵に見られることですが、しばしば額の上に描かれます。口の位置さえ明確ではないのです^[35]。本物の髪や動きが備わった美しい人形ではなく、素材がハンカチで、頭と目が付いただけの素朴な人形が子どもの理解を超えないものであるという。子どもはまだ口でさえも認識していないのである。さらにシュタイナーは次のように述べている。「私たちは小さな子どものようにまわらぬ舌で話したり、子どもの段階にまで下りて話したり、子どもが真実のはずであると感ずるようにならぬことを話すのならば、私たちは不真実に子どもに対応しています。しかし、私たちが不真実であってはならない一方で、私たちは意志や遊びの本質においては子

どもの段階にまで下りることができなければならないのです。そこから、今日私たちの文明のなかで特に好まれているもの、すなわち知性を、子どもが自分の有機的存在のなかに全く持っていないことが明らかになるでしょう。私たちはそれゆえまた子どもの遊びのなかに何らかの方法で知性的に占有しているものを持ち込むべきではないのです³⁶⁾。子どもの人形や遊具において知性的なものは、子どもの性質に合わないために遊びの世界に持ち込まれてはならないというのである。幼児はまだ知性的なものを理解できないため、精巧にできた美しい人形は子どもには与えるべきではないのである。シュタイナーは「4、5歳までの子どもを知的、精神的に教育すればするほど、ますます子どもは人生において物質主義者になるのです³⁷⁾」と警告している。そして、シュタイナーはさらに幼稚園の遊びについて次のように述べている。「幼稚園はフレーベルやその他の者たちによって真に心からの子どもへの愛情で設立されましたが、子どもが模倣的な存在であること、しかし知的ではないものだけを模倣することができることを明らかにしなければなりません。私たちは、考え出されたさまざまな子どものための製品を幼稚園に持ち込むべきではありません。幼稚園ではしばしば重要とみなされている棒並べ、編み細工のような類のものが考え出されたものとしてあげられます。私たちは幼稚園において、そのように特別に考え出されたものではなく、多くの人々が行っているものを絵のように実現するのがよいのです³⁸⁾。この見解から判断すると、シュタイナーは、フレーベルが考案した恩物でさえ知的なものであり、子どもの遊びの世界に持ち込むべきではないと考えている。シュタイナーは、遊具において知的なものを排除し、むしろ絵のように子どもがイメージできるものを重視したのである。シュタイナーの目指した子どもの遊具は、絵のように視覚的にかつ具体的に訴えるものであり、想像力に富んだイメージ豊かなものである。それは美的な要素で満たされている。たとえば、シュタイナー学校の教師であったカロリーネ・フォン・ハイデブランドは次のように述べている。「芸術的でなく、知的で、抽象的で、実際の人生とはなんの関係もないことは、注意深く避けるべきです。(フレーベル社のものの多くが、これにあてはまります)。モンテッソーリ教育で用いる、ボタンとボタン穴のついた二枚の布のような「教材」を使うよりも、実際に服を脱いだり、着たりするほうがよいのです。服を着たり脱いだりするの実際の生活でおこなわれることであり、教材を用いるのは生活を抽象化するものです。子どもは生活のなかに立ってほしいのです³⁹⁾。シュタイナーの幼児教育においては、フレーベル教育の知的な要素は否定され、またモンテッソーリの教育も抽象的な要素があると見なされる。シュタイナーは子どもの遊具において、具体的でかつ美的な要素を重視したのである。そこで、以下では、シュタイナー幼稚園における遊びの実例をあげながら、子どもの遊びについてさらに考察していきたい。

10

4-2 シュタイナー幼稚園における遊び —E. M. グルネリウスの実践—

シュタイナーは幼児教育について多くの考えを述べたが、幼稚園の設立は彼の後継

者に委ねられた。シュタイナーは資金不足のために幼稚園を創立できなかったのである。以下では、シュタイナーと交流があり、シュタイナー学校創設とともに始められたE. M. グルネリウスのシュタイナー幼稚園を例にしながら、幼児教育や子どもの遊びについて考察する。

E. M. グルネリウスは、ペスタロッチ・フレーベル・ゼミナールに学び、幼児教育を構築した。そうした経験から、彼女は「幼稚園はまず第一に、均衡のとれた調和のなかで子供が成長していけるような、最良の生活環境をもたなくてはなりません。それはつねに母親のいるあたたかい理想的な家庭の雰囲気をもたなくてはなりません」⁴⁰⁾。と述べている。そこには、幼稚園が家庭のようにあるべきだというフレーベルの考えが含まれているように考えられる。そして、グルネリウスはまた次のようにも述べている。「生活環境がもっと自然だったところの子供が母親のもとで受け取ることできたいろいろな刺激を、幼稚園がそのまま子供に与えることは不可能です。ですから、わたしたちは多くの芸術的な刺激でもって、これに代えなければならないのです」⁴¹⁾。グルネリウスは、フレーベルの考えを受け継ぎながらも、さらに幼児教育においては別のやり方、つまり芸術的な教育方法を取り入れるべきだと考えたのである。

では、シュタイナー幼稚園では実際にどのように遊びがおこなわれているのであろうか。グルネリウスは次のように述べている。「保育は子供たちの創意が自由に発展できるような「自由遊び」と、幼稚園の保育者がグループ全体を創造的に指導していく保育との間の釣り合いがうまく保たれるようにします。自由遊びが少なすぎると、子供は想像力と創意との開発、生活経験の消化がじゅうぶんになされるための貴重な可能性の場をうばわれます。反面、自由遊びのためにもまた、子供がつねにグループ全体による活動から、新しい刺激を受け取れるようになければなりません。それゆえ保育者はさまざまな芸術的形式を用いて、子供の魂が必要とする要素を与えられるようにするのです」⁴²⁾。グルネリウスは、自由遊びとグループ遊びのバランスをとりながらさまざまな保育を芸術的形式でおこなったのである。

では、自由遊びとはどのようなものであろうか。グルネリウスは次のように述べている。「幼稚園における自由遊びの仕方は、天候や季節によって、屋外や園内でのいろいろな遊び道具—砂場、ぶらんこ、木馬、羊毛をくるんだだけの簡単なお人形、絵本、色鉛筆、隠れ場所用の軽いきゃたつ、それに掛けるための色のついた布、スカーフ、ショール（それらはまた劇のときの衣装になったり、いろいろと自由に使えます）—これらが園児たちの自由にゆだねられます。誰にも強制されずに子供たちはそれらの遊び道具のところへ行き、そのなかから好きなものを取り出して、勝手に遊びはじめます。そのときおとなは最小限度にしか干渉しません」⁴³⁾。子どもは自分の遊びを自分で決定し、遊びの世界を創造する。子どもはイメージの世界で自由に遊ぶのである。また、グルネリウスの叙述から、たとえば「羊毛をくるんだだけの簡単なお人形」はシュタイナーが述べたハンカチでできた素朴な人形と同様のものであることが理解できる。グルネリウスは、子どもの遊具にすでに述べたようなシュタイナーの考えを

取り入れ、知的な要素を排除したのである。子どもはこの素朴な人形を使って自由に想像しながら、遊びの世界に没頭するのである。

次に、グループ遊びについて考察していきたい。シュタイナー幼稚園におけるグループ遊びは、お絵かき、ねんど細工、お話、歌、オイリュトミー、散歩といった保育内容である。これをグルネリウスは次のように計画をたてておこなう。「規則正しいリズムを保った保育は、堅実に、調和的に作用します。たとえば月曜日にオイリュトミー、火曜日にねん土遊び、水曜日にお話、木曜日に歌唱劇、金曜日にお絵かき、そして土曜日には皆でいっしょの散歩、といったふうです。もちろん、天候と四季に応じて」⁴⁴⁾。そして、たとえば「お絵かき」と「ねんど細工」においては、保育者がまず子どもたちに手本をみせるところから始められる。「登園してきた子供たちは、先生がすでにお絵かきの最中であるのを見つけます。(中略)先生は子供たちと挨拶をしても、お絵かきの仕事をやめようとはせず、描きつづけます。大人や年長の子供にたいしてなされるような筆使いや色彩についての必要な説明は、いっさい言葉ではなされず、ただそのまま子供たちの前でお手本として示します」⁴⁵⁾。「ねん土細工を子供たちが最初に体験するときにも、お絵かきのばあいとおなじように、なにも説明せずに、おとなのやり方をやって見せることが望ましいことです」⁴⁶⁾。子ども達は手本を見て、それをやってみたいという気持を抱きながら模倣するのである。そこには、すでに述べたように、シュタイナーのいう「模範と模倣」の原理がはたらいていると考えられる。また、グルネリウスは「歌」について次のように述べている。「子供たちがくりかえし歌うことに喜びを感じるような歌を選びます。子供たちのそのような願いは完全にとりいれられなくてはなりません。そしていろいろな歌をたくさん憶えたほうが良いのではないかと思って、何度でもくりかえしたがる子供の願いをしりぞけるべきではありません。特定のメロディーを何度でもくりかえし聴いたり、歌ったりすることは、子供たちの生活のリズムとくりかえしの特性にかなっています」⁴⁷⁾。すでに述べたように、シュタイナーは子どもの意志の形成には正しい行為の繰り返しが必要であり、そのためには繰り返し練習を必要とする芸術教育を子どもにおこなうように促している。グルネリウスはそうした考えを子どもの遊びに取り入れていると考えられる。

グルネリウスはシュタイナー幼稚園における遊びについて次のように述べている。「子供の遊びにはもっとも重要な特性のひとつ、創造的なファンタジー（想像力）が働いています。先生はこのファンタジーをたいせつに育成すべきなのです。ファンタジーは子供の行動にあたたかさや親密さを加えます。それは子供の感覚活動とまだしっかり結びついており、両者はほとんど区別がつかえません。ファンタジーの働く領域のなかでこそ、夢みがちな子供の生き方がまもられ、子供の内的特性がさまたげられずに自己を発揮することができるのです。冷静な、抽象的な、そして組み合わせ的な遊びは、ファンタジーによる遊びの対極です。それは幼児における現代の病—自己喪失の、興味にも情熱にも欠けた、ただやみくもの忙しさ—の支配を助長します。ファ

ンタジーによる遊びは、大人になってから、自分の仕事に心から、全人間的に取り組むことができるというもっとも価値ある能力のひとつの先ぶれなのです」⁴⁸⁾。シュタイナー幼稚園における遊びは、知的な要素や抽象的な要素、組み合わせ的な要素を取り入れることなく、子どものファンタジーを育むこと、つまり美的な要素を重視している。それは、子どもの感覚に合うものであり、また、子どもの将来において人間の原動力につながるのである。グルネリウスはシュタイナーの考えを継承しているといえるだろう。

5 おわりに

シュタイナーは、子どもの発達を基盤にしながら幼児教育についての考えを構築した。それは、幼児期だけを対象にしたのではなく、人間の生涯を全体的に概観した上で述べたものである。シュタイナーの幼児教育では、子どもが大人になることを前提にしながら、幼児期の子どもの特質が明らかにされたのである。そして、シュタイナーは幼児教育において、子どもの遊びを美的要素で満たすことを目指していた。シュタイナーは子どもの想像力の育成を考えたのである。グルネリウスのシュタイナー幼稚園は、こうしたシュタイナーの考えを継承したものといえるだろう。今日、早期教育を考えるあまり、子どもに不必要にさまざまな知的学習を強いる幼稚園が増えているが、シュタイナー幼稚園のように子どもの発達を考え、子どもの想像性を育みながら、自然にかつゆっくりとしたテンポでおこなわれる教育が子どもには本来的に求められているのである。シュタイナーの幼児教育は、子どもの立場を考慮した教育であるといえるだろう。

註

- 1) 入間カイ『これからのシュタイナー幼児教育 いま、大人にできること』春秋社、2010、P.156.
- 2) Rudolf Steiner. Die geistig-seelischen Grundkräfte der Erziehungskunst, Dornach, 1956 (3. Auflag. 1991), S.61. (以下、G.E.と略す)
- 3) G.E.S.61-62.
- 4) G.E.S.59.
- 5) Rudolf Steiner. Gegenwärtiges Geistesleben und Erziehung, Dornach, 1927(5. Auflage. 1986), S.104. (以下、G.G.と略す)
- 6) G.G.S.104.
- 7) G.G.S.105.
- 8) G.E.S.17.
- 9) G.E.S.18.
- 10) G.G.S.106.

- 11) G.G.S.107-108.
- 12) G.G.S.108-109.
- 13) G.G.S.109.
- 14) G.G.S.109.
- 15) G.G.S.109.
- 16) G.G.S.110.
- 17) G.G.S.110-111.
- 18) G.G.S.111.
- 19) G.G.S.111.
- 20) G.G.S.111.
- 21) G.G.S.111.
- 22) G.E.S.50.
- 23) Rudolf Steiner. Die Erziehung des Kindes vom Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft, Dornach, 1988, S.36-37. (以下、E.K.と略す)
- 24) Elisabeth.M.Grunelius. 高橋巖・高橋弘子訳『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』フレーベル館, 1981, P.16-23.
- 25) Rudolf Steiner. Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik, Dornach, 1932(8.Auflage.1980), S.75. (以下、A.M.と略す)
- 26) A.M.S.76-77.
- 27) Freya Jaffke. 高橋弘子監訳 井出芳弘訳『シュタイナー幼稚園の遊びと手仕事：生きる力を育む7歳までの教育』地湧社, 2009.
- 28) E.K.S.22.
- 29) G.G.S.106.
- 30) G.E.S.17.
- 31) G.E.S.17.
- 32) G.G.S.107.
- 33) G.E.S.59.
- 34) G.G.S.113-114.
- 35) G.G.S.114.
- 36) G.G.S.116-117.
- 37) G.G.S.119.
- 38) G.G.S.118.
- 39) Caroline von Heydebrand. 西川隆範訳『子どもの体と心の成長』イザラ書房, 1992.
- 40) Elisabeth M. Grunelius. 高橋巖・高橋弘子訳 前掲書24) P.52.
- 41) Elisabeth M. Grunelius. 高橋巖・高橋弘子訳 前掲書24) P.52-53.
- 42) Elisabeth M. Grunelius. 高橋巖・高橋弘子訳 前掲書24) P.53.
- 43) Elisabeth M. Grunelius. 高橋巖・高橋弘子訳 前掲書24) P.72.
- 44) Elisabeth M. Grunelius. 高橋巖・高橋弘子訳 前掲書24) P.69.
- 45) Elisabeth M. Grunelius. 高橋巖・高橋弘子訳 前掲書24) P.56.
- 46) Elisabeth M. Grunelius. 高橋巖・高橋弘子訳 前掲書24) P.59.
- 47) Elisabeth M. Grunelius. 高橋巖・高橋弘子訳 前掲書24) P.66.